織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

一豊と掛川

その11（完）

高知城の天守は、「遠州懸川のとおりせよ」

慶長７年（1602）「掛川城のとおり」と築かれた高知城天守閣

平成6年（1994）市民募金により本格木造で復元された掛川城天守閣

◆掛川の面影を新領地に求める

慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いは、東軍の大勝利となりました。９月27日、徳川家康は大坂城に入り、合戦の論功行賞を行います。もちろん、東軍に属した諸将が所領を与えられ、逆に、西軍に属した諸将の減封・所領没収が行われました。その方針は、加恩という形で所領は増加させながらも、豊臣大名を枢要の地から遠隔地に追いやるものでした。江戸や東海道の要地には徳川譜代の武将たちが配置され、掛川城の一豊は20万石と所領が大幅に増えましたが、遠隔地の土佐が新領地となりました。

一豊に土佐への転封が伝達されたのが慶長５年（1600）の11月ごろで、翌年1月には土佐へ移っています。このことからも、山内家は新領地土佐への対応と、旧領地掛川の処置に迫られ、慌ただしく移転が行われたと思われます。しかし、一豊は「掛川の侍屋敷を荒らさないように」と強く指示を与え、ぞんざいを戒めています。

円満寺（掛川市西町）に祀られている一豊の位牌

山内家に代わり掛川城に入った領主は、母親が家康と同じ「於代の方」の松平定勝で、掛川3万石の大名として入封します。以後、掛川城は徳川系武将の領地となります。

◆徳川家の許可を得て、あえて豊臣時代の天守を建築

一豊の家臣の半数近くが掛川在城時代に召し抱えられており、その家臣と共に土佐へ転封後、掛川時代ゆかりの建物・寺社を建立しています。

- 高知城で天守閣を築いた時、一豊は「遠州懸川の天守之とおり」と指示を与え、最上部に物見の部分を載せた望楼型にするよう求めています。望楼型天守は豊臣時代に作られた天守の特徴で、家臣の岩田平蔵を徳川幕府につかわし、内諾を得て築いたといわれています。
- 潮江山の麓に真如寺（高知）を建立し、掛川の在川兼昨和尚を呼び寄せ開山します。
- 慶長7年（1602）、円満寺（高知）を小高坂に建立します。
- 慶長8年（1603）、掛川にあった要法寺を土佐へ移設します。
- 二代目「忠義」時代には、龍尾神社の御分霊を掛川神社として高知城の東北に建立します。

掛川在城は10年間でしたが、現在の町並みや道路、河川、寺社などに、一豊が行った町づくりの功績が多く残っています。

一豊は領主となる「忠義」と家康の養女「阿姫」との婚約を成立させ、慶長10年（1605）９月20日、61歳の生涯を終えます。千代と共に戦国時代を乗り切り、明治まで続く土佐山内家の基礎を築いた激しい一生でした。

在川和尚が導師を務め、潮江山（真如寺山）に葬られました。

（監修：掛川市郷土研究会連絡協議会）